第二部テーマ「社会課題を成長のチャンスに変える」シンポジウム2025

「つながり」があふれる地域コミュニティへ

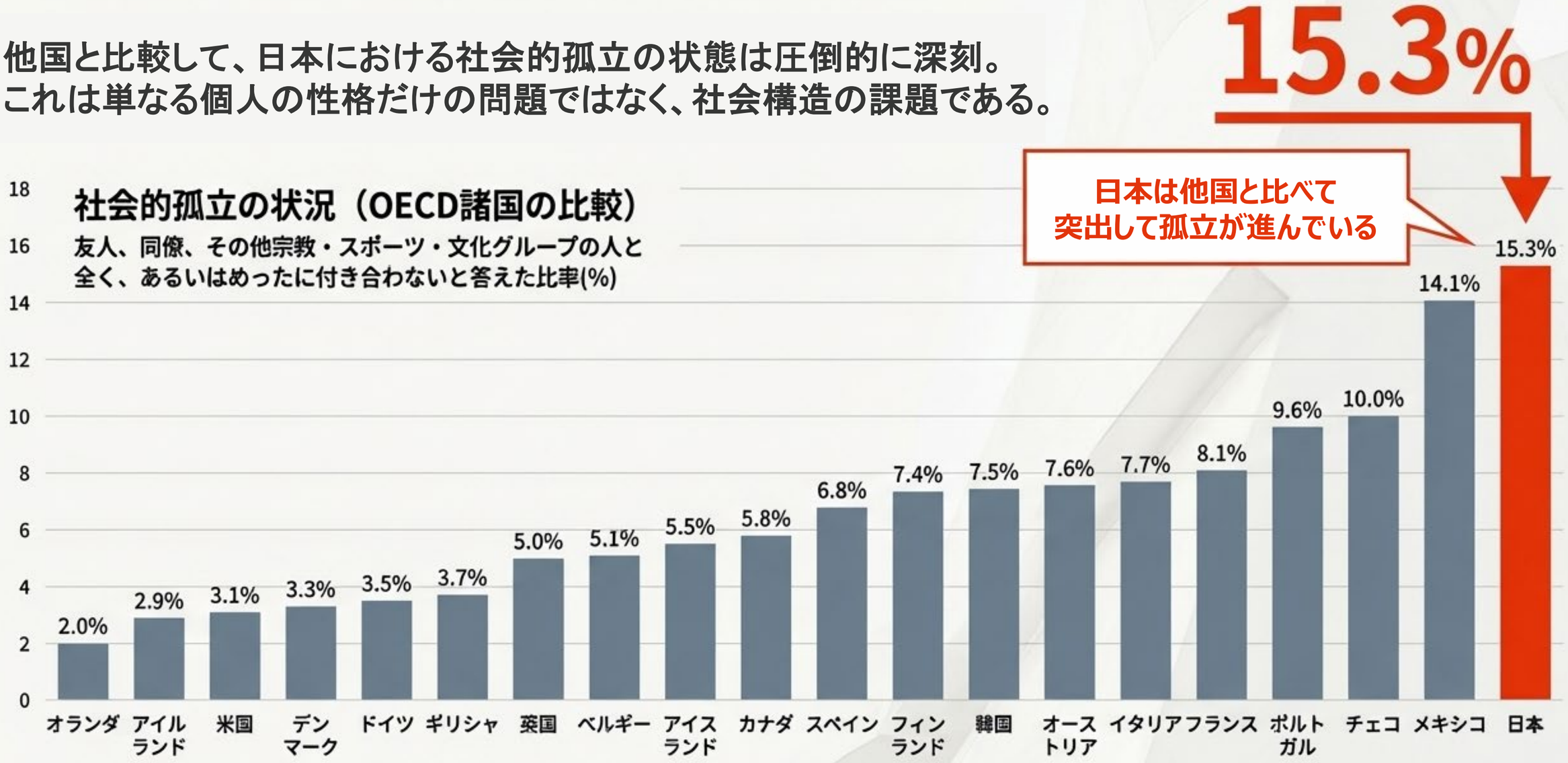
包摂的コミュニティプラットフォームの構築

A1：コミュニティ再生
D2：移動支援

発表担当
大和ハウス工業株式会社　中野伊吹

世界でも「孤立」している人が多い国、日本

他国と比較して、日本における社会的孤立の状態は圧倒的に深刻。
これは単なる個人の性格だけの問題ではなく、社会構造の課題である。



（注）原資料は世界価値観調査1999-2002。英国はグレートブリテンのみ。
（資料）Society at a Glance:OECD Social Indicators – 2005 Edition
（出典）社会実状データ図録

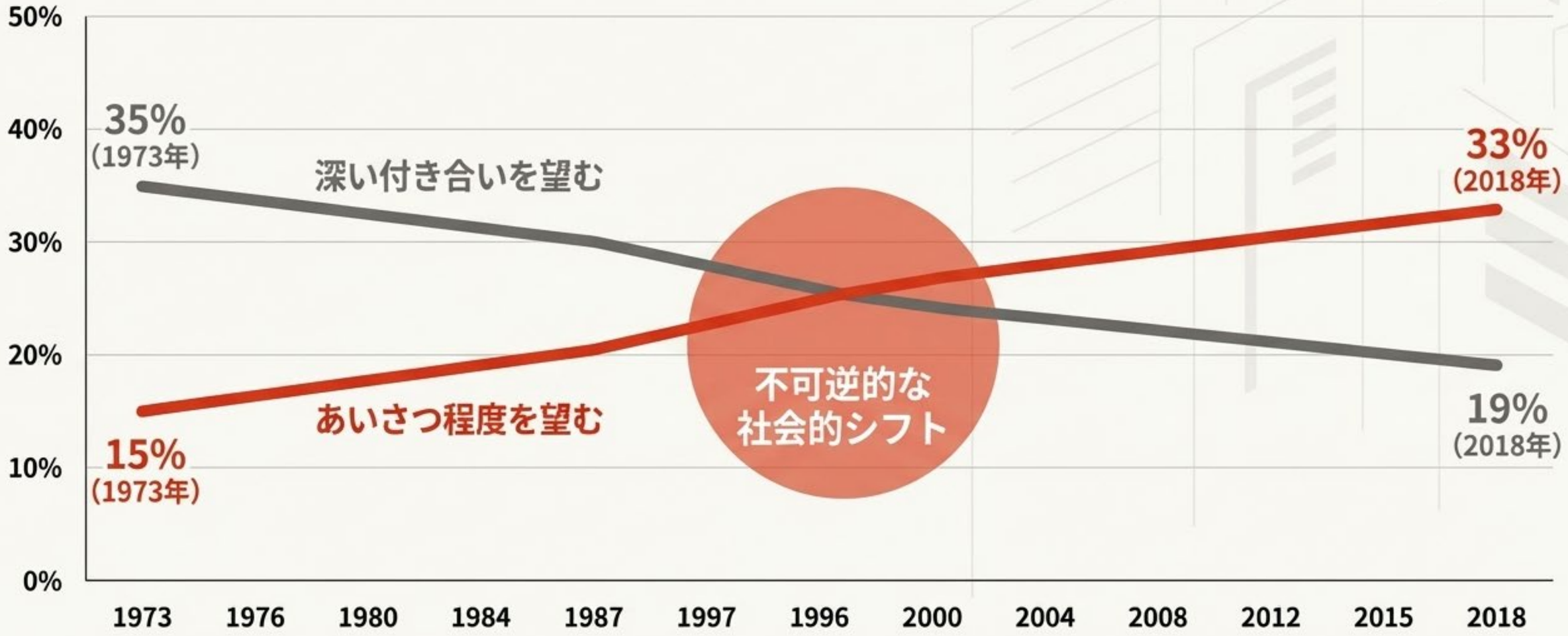
孤立は、1日15本の喫煙に匹敵する健康リスク

社会的孤立 ＝ 死亡率50%増 ＝ タバコ15本/日

死亡率を約50%増加させ、その悪影響は「肥満」や「運動不足」の約2倍に達する。孤立は個人の幸福だけでなく、地域の持続性や医療・介護インフラを破壊する要因である。

住民が求めているのは「濃密な地縁」ではない

現代人のニーズは明確にシフトしている。深い付き合い（相談・助け合い）を望む層は激減し、あえて「あいさつ程度」の緩やかな関係を望む層が過去最高に。



（出典）NHK放送文化研究所「日本人の意識調査(1973-2018)」から表現変更

「多様で緩やかなつながり」を“意図的にデザイン”する

かつての濃密な地縁

自然発生

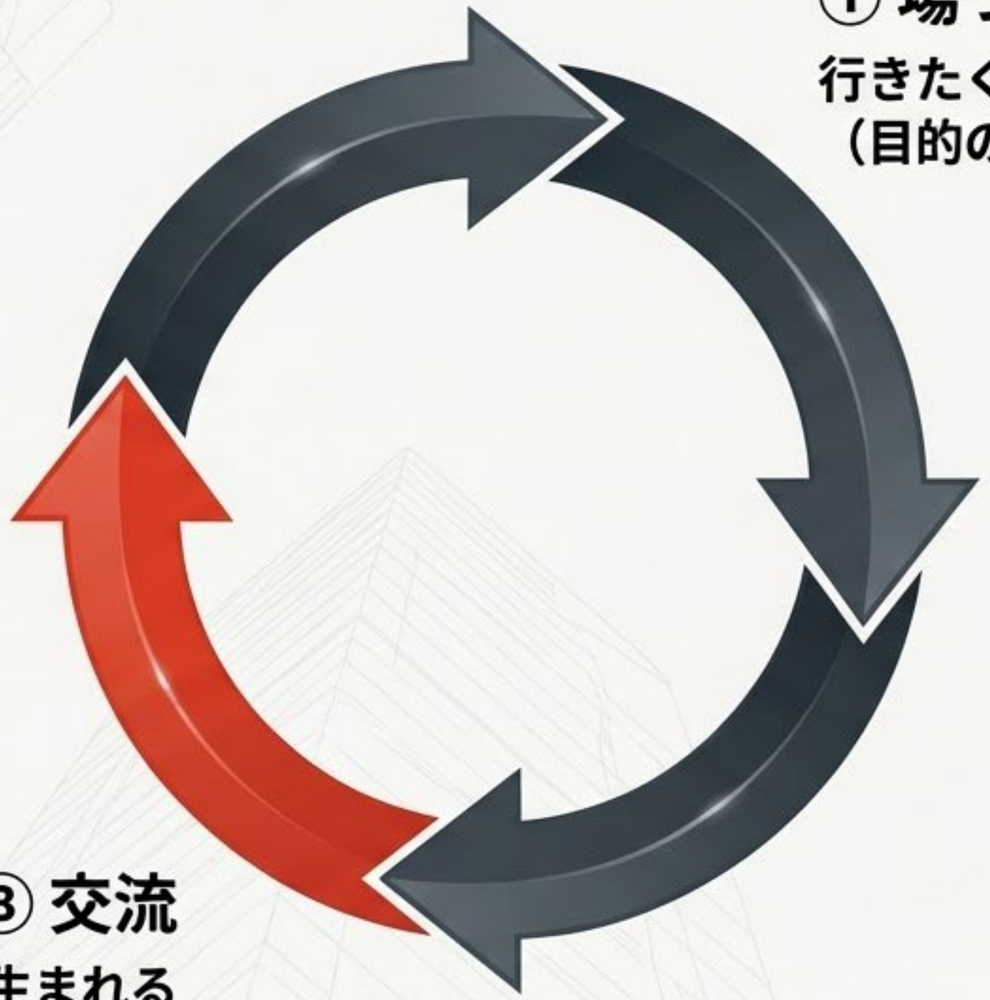
→

これからのインフラ

つくれる仕組み

かつてのように「自然に」つながりが生まれる時代は終わった。
長寿社会において「つながり」は生活インフラとなる。
住民が「無理なく」外出・交流できる“きっかけ”を
“日常”から支える仕組みとして再設計する必要がある。

行動を起点につながりを生む「4つの循環モデル」



① 場づくり

行きたくなる場・活動をつくる
（目的の創出）

② 移動

行ける移動手段を用意する
（参加ハードルの低下）

③ 交流

出会い・交流が生まれる
（参加から関係へ）

④ 改善

データで学び、次の打ち手を
改善（EBPMの実現）

参加のハードルを極限まで下げる「移動の確保」

徒歩が厳しい層でも確実に「行ける」手段を確保することが、つながりの下支えとなる。

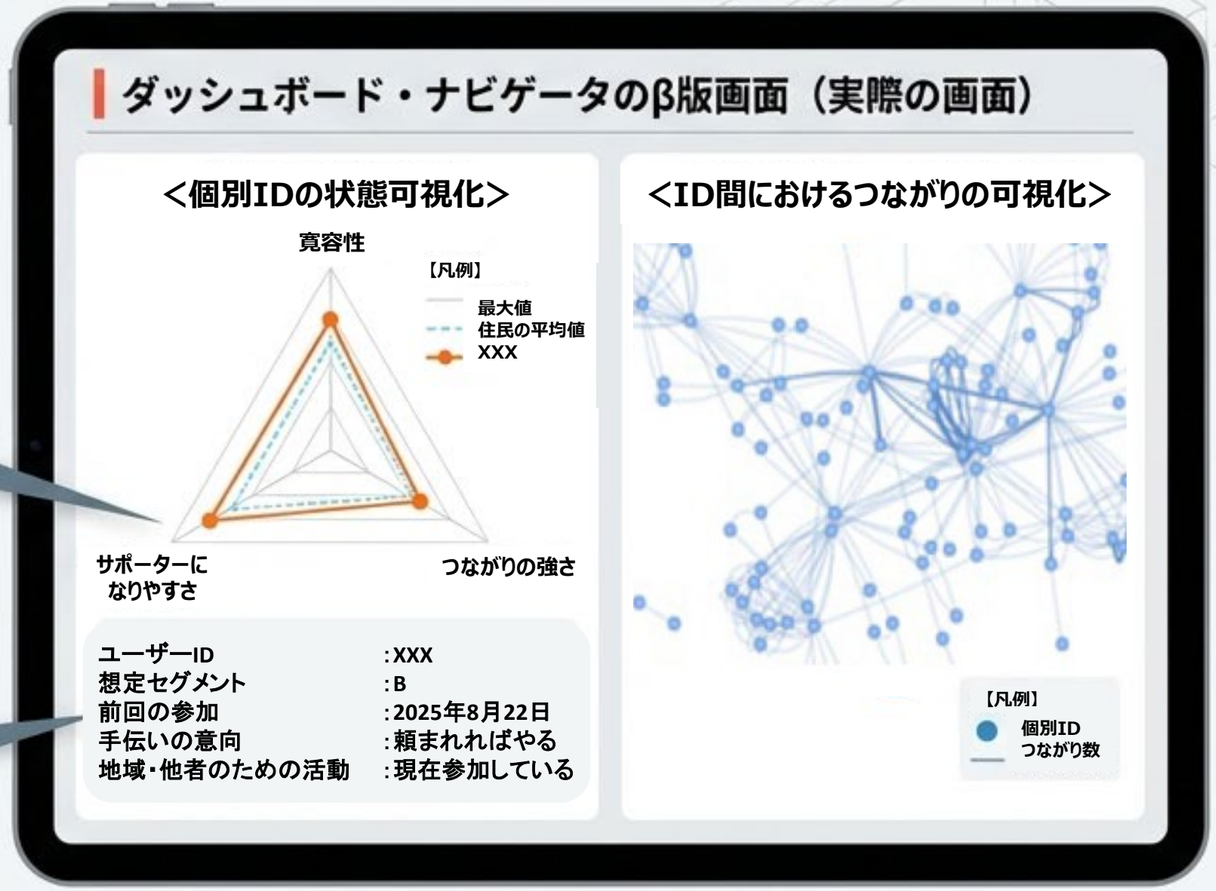
- 低速・低コストの自動運転モビリティ。
- 安全走行と低コスト運用により、自治体・企業にとって極めて導入（実装）しやすいインフラ。

属人性を排除し、データで施策を回す（EBPM）

個人の状態（寛容性、手伝いの意向）と、
ID間におけるつながりの強さを可視化。
ID間におけるつながりの強さを可視化。
状態把握 → 打ち手 → 効果検証 → 改善のサイクルを回し、調査負担を減らして実務者が使えるシステムへ。

1 サポーターになりやすさ

2 推定セグメント



自治体・企業がこのプラットフォームを導入する3つの価値

価値1：住民・顧客の外出／来訪を劇的に増やす

（地域経済と活気の創出）

価値2：交流の質を高め、多様性のあるコミュニティを構築する

（ウェルビーイングの向上）

価値3：施策をデータで可視化・改善し、運営の属人性を減らす

（持続可能な運用とEBPMの実現）

まずは「あなたの場所」で、小さく一緒に試しませんか

[redacted]

実証地（共創パートナー）を募集しています。
「うちでもやってみたい」という方は、ぜひ展示ブースへお越しください。

- 対象フィールド: 団地、公共施設、駅周辺、商業施設、企業キャンパス等
- 検証テーマ: 外出／来訪増、参加の裾野拡大、交流の質（多様性）
- 進め方のメリット: 大規模導入の前に、小さく始める → データで改善 → 拡張

短期（半年ほど）のトライアルでも検証可能

（連携相談：実証フィールド／運用／データ連携／事業化）→